

心に届く
信心真話

娘の不登校をおかげに

今 から6年前、私(52)の娘(当時

小学5年生)が「人が怖い」と言いだし、やがて学校に通えなくなりました。友人をはじめ、家に来る宅配便の人にもおびえるようになり、私と妻は明るく元気だった娘に何が起ったのか、戸惑うばかりでした。

やがて、「お父さんお母さんは、私の気持ちを全然分かっていない!」

「親が悪いから、不登校になってしまった!」と、感情を爆発させ始めました。さらに時折、別人格が乗り移ってしまう「解離性障害」のような症状が現れてきたのです。

「今まで一生懸命育ててきたのに、どうしてこんなことになったのだろう」。私は、自問自答を繰り返しました。

そうして、不安と悲しみに明け暮れる日々が続

く中、私は教会の先生に苦しい胸のうちの明かし、娘が立ち直るように願ったのです。私の悲痛なお届けに、先生は次のように応えました。

「親として今は本当につらいでしょう。でも、神様はあなた以上に娘さんに思いを掛けてくださっています。不登校がおかげとなるよう、祈らせて頂きましょう」

電

話を終えた私は、そばにいた妻に、先生から言われたことを伝えました。妻は、「神様から宿題を頂いたと思つて、頑張る」と言いました。

それからしばらくたったある日のこと、娘の小学校に勤務するカウンセラーの紹介で、子どもの臨床心理学が専門の大学教授にカウンセリングを受ける機会を得ました。

私と妻は、子どもとは別にカウンセリングを受けました。その時、教授から、次のように言われたのです。

「今後、学校へ行けたとしても、不登校の根本

原因が解決しなければ、再び学校に行けなくなり、問題があることに気付いて、まずは良かったですね。親御さんは、どっしりと構えて、娘さんの本当の気持ちを理解するよう、ここから努めてください」

一

時、教会の先生から言われた「不登校がおかげ」という言葉が頭をよぎりました。そして、「この教授との出会いには、神様からのお差し向けに違いない」と、そう思わされたのです。

実際、この教授との出会いを通して、私たち夫婦はこれまでの子育ての誤りに気付いていったのです。

私たちは、娘に思いやりのある子に育ててほしいと願っていました。ところが、そのことが娘に「良い子」を強要してしまっていたのです。

思えば、娘が学校の友人関係のトラブルを私に

話してくれた時も、彼女の気持ちをそのまま受け止めず、「自分より相手のことを思いなさい」と、たしなめていました。

娘

は親の期待にこたえようとすると、あまり、「良い子」を演じてしまい、無意識のうちに悔しい気持ちや不安といった感情を抑え込んでしまつて、心のバランスを崩していたのです。

私と妻はカウンセリングを重ねながら、娘の感情をそのまま受け止めるよう心掛けました。すると、娘も安心したのか、次第に心を開き始め、6年生になると学校に行けるようになりました。

娘の不登校を通じて、神様は子どもの正直な気持ちに耳を傾け、祈りながら寄り添うことの大切さを私たち夫婦に気付かせてくださいました。

娘は現在、高校2年生になりました。今日も「行ってきます」と、娘の元気な声わが家に響きます。



良い子演じ、心の均衡崩した娘

※このお話は実話をもとに執筆されたものですが、登場人物は仮名を原則としています。